www.ficec.jp

外国人と日本人とが、ともに豊かに生きる地域社会を!

ハローフレンズ

ファイセック FICEC
発行
ふじみの国際交流センター
Fujimino International Cultural Exchange Center

2010年 12月号（隔月刊） 第112号

異文化交流と国際ボランティアの祭典
「かわごえ国際交流フェスタ」開催

2010年11月7日、東武東上線川越駅近くにある「川越駅西口暫定自由公園」で、「かわごえ国際交流フェスタ」が開催された。「かわごえ国際ボランティアの会」が主催し、川越市、川越教育委員会といった自治体機関や、東京国際大学、尚美学園大学などの大学、川越商工会議所、小江戸川越観光協会などが後援して行われた催し。当日、公園内には10以上のテントが張られ、「屋台村」が出現。それぞれの屋台では、海外の物品を販売したり、珍しい食べ物が販売されたりして、お祭りとして盛り上がった。屋台村中央の広場では、チリのダンスやブラジルの格闘技・カポエイラなど、民族色豊かなパフォーマンスが繰り広げられた。

（写真協力：岩村清克）

富士見市の小学校で国際理解講座

日本と違う中国の事情に、みんなが驚きの声
帰り際には子どもたちが鈴なりで「さようなら」

１０月中旬　国際理解の授業のため富士見市の関沢小へ行ってきました。今回授業を受けたのは、３年生３クラスの子ども達です。「総合的な学習の時間」で実施される国際理解の授業は、３年生から始まるということで、先生達と話し合った結果、身近な国を学習しながら違いや共通点を意識させていこうということになりました。

講師を務めてくださったのは、中国出身の金子杜子さん。在日２０年、日本の大学も卒業しておられる方です。みんなで授業の流れを確認した後、掲示物等は先生方に用意してもらい、センターから持参するもの、金子さんが持参するものなどの確認をしました。

当日、子ども達は好奇心に満ちた目と、大きな笑顔で私たちを迎えてくれました。初めて授業をする金子さんは少し緊張気味のようです。最初の授業は私も少し手伝いをしながら進めましたが、２回目３回目の授業は、担任の先生方が、上手にリードしてくださり、金子さんも自分のペースをつかみ、落ち着いて、授業を進めることができました。

地図で中国の場所と広さを説明

「えつー」と大きな声が上がったのは、中国の子どもたちが、一日４時間以上の宿題をこなしていると説明があったときです。しかもほとんどの児童が、寮生活をしていると聞いて、「日本人でよかった」なんてつぶやいていた子もいました。今の中国の成長の勢いは、こんなところにも表れているのかもしれません。

子ども達に楽しんで欲しいと思い、計画したのは漢字クイズです。同じ漢字を使う国ですが、共通点や違いがあります。

きっとびっくりするだろうと思って出した、「トイレットペーパーは中国語でなんという？」は、知っている子が何人もいて、簡単に[手紙]と正解を出されてしまいました。今は、情報にあふれた時代なんですね。この漢字クイズは、子ども達も先生方も楽しんでもらえました。

すべての授業が終わった後、校長先生が金子さんに「本当に初めての授業ですか？とても上手でびっくりしました」と声を掛けてくださいました。子ども達の興味を上手に引き出して授業を進めていた金子さんは、とても楽しそうで自信に満ちていました。

帰り際、校舎の窓から子ども達が鈴なりになって「さようなら！」と声を掛けてくれました。今政治の世界では、日本と中国間がギクシャクしており、この授業を持つことには多少の不安もありました。しかい、お互いを知り合うところから本当の国際親善が始まるのだという思いを新たにしながら、帰路に着くことができました。（文：山畑博子）

いろんな話ができて楽しい授業でした　　金子杜子

先日は、富士見市関沢小３年生の生徒さんと一緒に、日本と中国は近い国ですけれどもわからないことが多いので、それについて話し合いました。

日本の人口は１億以上います。中国は１３億以上います。“エッー”、生徒さんは皆驚いて声を上げました。土地は、日本の２５倍以上あります。“エッー”、これにも驚いたようでした。

日本で使っている言葉は一つ、中国はいろんな少数民族と地域の言葉が１００語以上あります。本当に多いですよ。

生徒さんは、私が持ってきたチャイナドレスは“テレビでは見たことがあるけれど実物は初めて見ました”といいました。チャイナドレスは主におめでたいときに着ることを説明しました。生徒さんは、中国の京劇の面をみて、ちょっと顔がこわいなと言いました。

中国の小学校は何年間ありますか？　３年、１０年とか答える人がいましたが、中国の小学校中学校までは義務教育ですから、日本と完全に同じです。

つぎに小学校の宿題や、給食や、通学についてお話ししました。中国の小学生は、１３時間以上宿題があります。学生寮に泊まります。学生寮でお食事します。生徒さんはそれを聞いて想像できないような顔をしました。

つぎ漢字クイズについて、足球（サッカー）足が使うですからすぐ分かりました。信件？（手紙）ヒントを出して遠い友達と友達の連絡は何ですか？　“メール”、“電話”と答えました。そうですね。今の現代人ですからね。電脳（パソコン）漢字を書いて、なかなか分からないです。同じ漢字を使用しているのに難しいですね。

あっという間に時間が過ぎました。クラスの先生から、生徒さんに感想がありますか？答えは“短い間に、中国のことをたくさん知り勉強になりました”。生徒さんの声を聞いて私も嬉しく思いました。生徒達は明るくて、いろんなお話ができて、お互いに楽しい時間でした。

中国と日本の違いを説明する金子杜子さん

市民と学生が協力して

外国人のための生活マップづくり

ふじみ野市と文京学院大学が共同で「まちづくり大学」

ふじみ野市は毎年、同市内にキャンパスをもつ文京学院大学と共同で、「まちづくりまちおこし大学」講座を開催している。これは、同大学の学生とふじみ野市に在住・在勤する市民が机を並べ、地域に関するさまざまなテーマについて、共に学び、共に考えようというもの。市と大学との連携協力協定にもとづいて、平成20年度から行われているものだ。

今年（平成22年度）のこの講座では、「外国人にやさしい生活ガイドマップ作り」がテーマに選ばれて開催された。受講者が、市内在住の外国人の話を聞いて、外国人が生活するのに必要な施設などを掲載した地域ガイドマップを作ろうというもの。市と大学に加えて、ふじみ野市に拠点をもつ外国人への支援組織（ＮＰＯ）・ふじみの国際交流センター（FICEC）も協力して制作し、出来上がった地図は5ヶ国語に翻訳されて、市が発行する「外国人のための生活ガイドブック」の折り込み地図として利用されることになっている。

講座は、10月2日～11月27日にかけて5回、いずれも土曜日の午前10時～12時に文京学院大学で開催された。受講者は、学生、市民合わせて32人。学生、市民、いずれにも外国出身者が含まれていて、学生＝市民、外国人＝日本人が協力する形での地図プロジェクトとなった。

講座の各回で行われた内容は次のようなものだった。

第一回
外国人の経験について討論

講座の第一回（10月2日）は、「ふじみ野市に暮らす外国人」と題して、FICEC理事長の石井ナナエさんと、外国出身でふじみ野市に暮らす山崎友理さん（台湾出身）、渡辺マリフェさん（フィリピン出身）から話を聞いた。石井さんは、FICECで日常的に外国人からの生活相談を受けていることから、外国人が日本でどのような点に困っているかを説明。山崎さんと渡辺さんは、日本に来て困った経験などについて紹介した。二人から共通して出たのは、医療に関する事柄。自分や子どもが具合が悪くなったときに、どの病院で診てもらえばいいのか、病名は何なのかがなかなかわからなかった。また、日常的に買い物をするにも、日本語でしか書いてないために、中身がわからないなど、日本人では想像もつかないような困りごとがあるといったことが披露された。

さらに参加者との質疑応答でも、中国から

外国出身の人たちが困ったことなどを説明

学園祭の屋台で外国の人たちが出店

グループに分かれて調査項目を検討

来た留学生から、市役所での手続きがわかりづらかったことなどが語られた。

第二回
学園祭で外国料理を食べる

講座の第二回（10月16日）は、「外国料理を食べる」がテーマ。当日は、ちょうど文京学院大学の学園祭で、学内は学生らが出店する模擬店などで大にぎわい。それにまじってふじみ野市在住の外国人が自作料理の出店をした。受講生たちは、大学生や学園祭に来訪した市民とともに、工夫して作られた外国料理を味わった。

第三回～第五回
地図づくりワークショップ

第三回（10月30日）以降は、いよいよ「外国人のためのガイドマップ」づくりの作業が、ワークショップ形式で行われた。まず、受講生が地図に掲載する項目別に4班に分かれて、どのような内容を掲載するか、掲載項目をどのように調査するかなどについてグループ討議。班分けは、A班が「金融・交通・不動産」、B班「飲食施設、外国人支援施設」、C班「買い物」、D班「観光施設」という区分けで、それぞれの班には外国人・日本人が両方入っている構成。第四回（11月20日）までに3週間ほどの期間があることから、この間に各班の人たちが協力して、掲載項目について調査をしてくることになった。

そして、第四回では、その結果報告が各班から行われた。いずれも、調査結果の項目一覧や、パワーポイントでの映写資料を作成して、熱の入った報告ぶり。各班からの報告内容については、受講生全員で討議。多すぎる項目については、どんな点を基準に掲載施設を厳選するか、また追加すべき項目はどのようなものかといった点について、意見が出された。そうして指摘された意見などにもとづいて、第五回（11月27日）までにさらに調査して、項目内容を精緻なものにすることになった。

そして最終回の第五回では、各班から、前回で指摘された点についての修正などを行ったうえで、項目を図面上に表示した地図が紹介された。その内容を見ると、通常の地図項目にはない、外国人支援団体の所在や、外国人経営の料理店、海外送金・外貨両替のできる銀行・郵便局など、外国人に役立つ項目が満載されている。

こうして受講生が作成した地図項目は、ふじみ野市側に引き渡され、冒頭に紹介したガイドブックの折り込み地図用のデータとして利用されることになっている。ガイドブックの完成は、来年3月中の予定だ。

（取材・文：内藤忍）

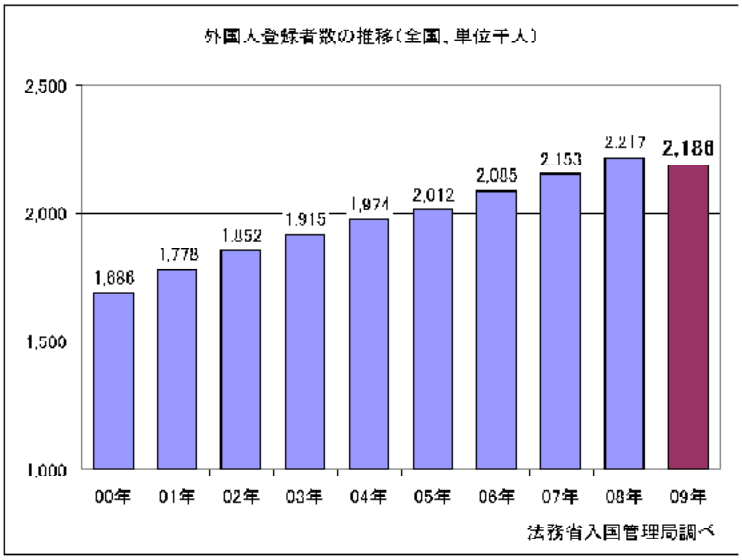
2009年末の外国人登録者数は3万人余りの減少

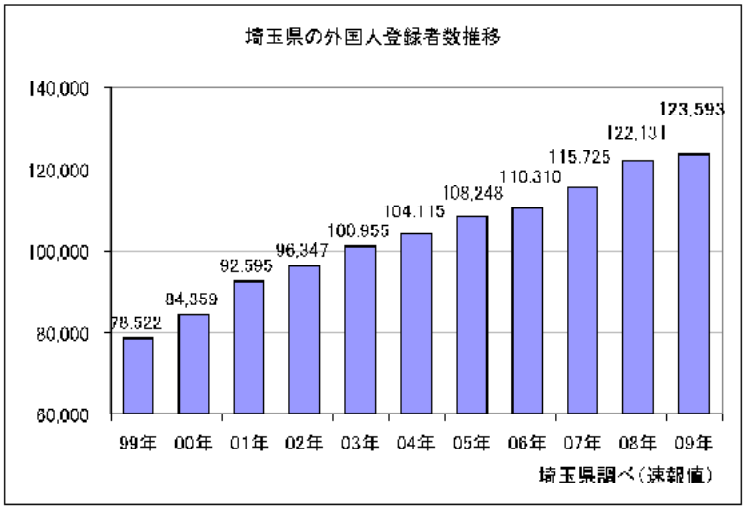
埼玉県およびふじみ野周辺二市一町では増加

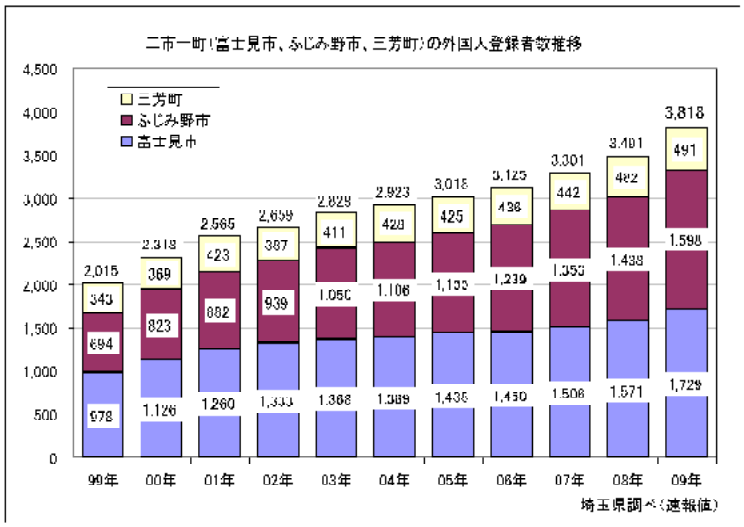
昨年（2009年）の外国人登録者数は、今年7月6日に法務省入国管理局から発表された。そのデータによると、最初のグラフのように2009年末現在での外国人登録者数は218万6,121人で、過去最高を記録した2008年末から3万1,305人の減少となった。2009年1年間の外国人入国者数も、前年から156万人も減少しており、それを反映する形となっている。

外国人登録者数の増減を出身国別にみると、中国、フィリピンなどが若干増加しているのに対し、ブラジル、ペルー、韓国・朝鮮などが減少となった。ことに、ブラジルは4万5,000人余りの減少となっており、国内での製造業などの雇用状況の悪化などが影響しているものと考えられる。

一方、県別で見た場合は、二番目のグラフのように埼玉県ではむしろ増加となっている（埼玉県調べの速報値）。また、ふじみの国際交流センターが主な活動範囲としているふじみ野市、富士見市、三芳町の二市一町でも、三番目のグラフに示したように、外国籍の住民は前年よりも増加となっている。







外国からの看護師・介護士に国家試験の大きな壁

藤林 美穂

一時期さかんに報道されていた「外国人看護師・介護士」。どんな制度かというと、インドネシア・フィリピンから看護師・介護士の候補生を募って日本に来てもらい、病院で3年間実地訓練を積みながら研修を受けます。しかし、3年間のうちに日本の看護師・介護士の国家試験に合格しない場合は帰国しなければなりません。試験は、日本人も受験するもので、もちろん日本語で行われます。

実際にインドネシアから候補生たちがやってきたのは2008年（09年からはフィリピン人も来日）。しかし、09年の看護師試験では合格者はゼロ。今年の試験では外国人受験者254人中、わずか3人が合格しました（日本人は9割が合格）。日本語が壁、と言われる試験で合格した人はものすごく努力したんだろうな、と思う一方で、試験は「狭き門」というよりは「帰国させるための口実」なのではないかという気もします。

今年に入って、候補生たちを受け入れる日本側の病院の数が198から61へと3分の1以下に減ってしまい、また送り出し国でも候補生たちが日本を敬遠して予定通りの人数が集まらない、という低調ぶり。受け入れる病院は宿舎や手当を確保しなければならない上に、3年のうちに合格しなかったら帰国となるために、どこまで予算をつけて教育するべきか、見通しが不透明、ということもあります。政府にも定まった教育方針はありません。

そもそもこの制度はどこから始まったかというと、小泉政権時代に経済自由化の流れで日本がインドネシア、フィリピンと結んだEPA（経済連携協定）の中で取り決められたことでした。このEPA、私は看護師の問題としかとらえていなかったのですが、調べてみると、車の部品や鉱物資源、農産物などの関税を取り払って貿易をしやすくする、などの取り決めの中に「自然人の移動」という項目があり、モノの貿易の中に「ヒト」の移動も含まれているのでした。

つまり、外国人看護師・介護士の受け入れは、医療現場での人手不足やニーズとは別の場所で決められたことだったようで、政府の中でも外務省・経産省などは受け入れ賛成、厚労省は反対と迷走状態が続いており、それが方針のブレや受け入れの低調にもつながっているのでしょう。

前回問題だらけの「研修生制度」について書きましたが、この看護師・介護士受け入れは、新たな医療版・研修生制度になってしまうのではないかと心配です。日本の医療現場で看護師・介護士が本当に不足しているとしたら、それはきつい労働にもかかわらず待遇が悪いからでしょうし、それをただすことなく外国人で補う、という発想は「時給300円」の研修生制度と変わりありません。それが医療現場でどのような影響をもたらすのか、不安になります。

●筆者紹介
行政書士（ライフ行政書士事務所）。
NGOで働いたり、フィリピン人支援団体でボランティアしたりした後、行政書士開業。毎日いろいろな国から来たいろいろな人の話を聞いて、「在日外国人」の多様性に、びっくりすることの連続です。

センターの活動をご支援ください
会員・賛助会員・寄付のご案内

●活動を担う会員……正会員
正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。
年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

●センターを財政的に支える会員……賛助会員
賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。
年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

会員、賛助会員にはこの機関紙をお送りします

郵便振替口座：00110-0-369511
口座名：ふじみの国際交流センター

ご寄付をいただいた方々
ご支援ありがとうございます

●2008年4月～（50音順・敬称略）
(株)オムテック　尾高昇　太田原裕　小原富明　葛西敦子　加藤久美子　金子忠弘　金子康子　国際ソロプチミスト埼玉　後藤泰博　駒形一夫　斉藤彩子　宍戸フミエ　菅山修二　鈴木譲二　田口信一　立麻医院　曹圻　寺村仁　鳥居政子 中嶋恵津子　西山正浩　萩原千代子　東入間地区遊技業防犯協力会　(株)マイカル大井サティ　馮雪蘭　百瀬滉　柳原国江　(有)矢野住研　山畑博子　吉田純一　ワン・シーウェン

ご寄付のお願い

住民の60人に1人が外国人という埼玉県の現状の中、ふじみの国際交流センターでは、結婚・出産・育児・ビザ・医療・労働など、課題別の「多言語生活ガイドブック」をつくりたいと考えています。できたら県内全域に配布して、外国人犯罪や被害が起きないように、14年に渡る生活相談の実例を踏まえた情報を提供したいのですが製作資金がありません。なんとか寄付をお願いできないでしょうか。
埼玉県のNPO基金に「指定先ふじみの国際交流センター」と明記して寄付をしていただきますと、市民税・所得税の控除が受けられます。国家予算も全額1割カットという経済状況の厳しい最中に厚かましいお願いですが、正しい情報さえ得られれば、起きないですむ事件や悲劇がたくさんあると思います。よろしくお願いします。

ふじみの国際交流センター（FICEC）一同

サービス料金表

ふじみの国際交流センターでは、センターの設備や、会員・スタッフの技能により、様々なサービスを行っております。ぜひ、ご利用ください。

種別	料金	対象
印刷機	マスター（製版代） １枚１００円 印刷代１枚１円	市民団体 個人
コピー機	１枚１０円	
製本機	Ａ４判１冊５０円	
折り機	無料	

種別	内容		料金	
講師派遣	国際理解教育		3,000円＋交通費	
	外国料理教室		5,000円（材料費別途）	
	語学教室		内容・予算に応じて相談	
企画・運営	国際交流・国際理解に関するイベントや研修の企画・運営等			
編集・出版 ホームページ	多言語による情報誌・ガイドブック、ホームページの制作			
	日本語によるチラシデザイン（A4判）		１枚5,000円	
翻訳	英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、タガログ語、タイ語、ロシア語、ベトナム語	婚姻関係、ビザ申請、履歴書	A4判1頁、40字・30行	1枚1,000円
		その他の文書	A4判1頁、40字・20行	1枚3,000円より
通訳	英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、タガログ語、タイ語、ロシア語、ベトナム語、シンハラ語		半日5,000円＋交通費	

特定非営利活動法人ふじみの国際交流センター
〒356-0053 埼玉県ふじみ野市大井2-15-10
うれし野まちづくり会館2階
Tel：049-256-4290　Fax：049-256-4291

ボランティア活動に、ご参加ください

ふじみの国際交流センターでは、日本語指導をはじめ、外国籍市民との交流・手助けをするボランティアを募っています。ぜひ、電話またはホームページから、お気軽にご連絡ください。